


 研究
報告

宮城県におけるクモヘリカメムシの発消長と分布地域

宮城県古川農業試験場 作物保護部 おお え たか ほ
大 江 高 穂

はじめに

クモヘリカメムシ (*Leptocorisa chinensis*) は、斑点米カメムシ類の1種で、イネ籾の吸汁加害によって斑点米による落等被害を発生させ、多発生時には青立ち症状を引き起こすことが知られている(藤田ら, 2000; 横須賀, 2001)。また、本種の分布地域は宮城県南部が太平洋側の北限であるとされている(藤崎, 1982)。

宮城県における斑点米カメムシ類の主要種として、アカスジカスミカメ (*Stenotus rubrovittatus*)、アカヒゲホソミドリカスミカメ (*Trigonotylus caelestialium*)、フタトゲムギカスミカメ (*Stenodema calcarata*)、ホソハリカメムシ (*Cletus punctiger*)、クモヘリカメムシの5種があげられるが、この中で最も重要な種はアカスジカスミカメである(永野ら, 1992)。そのため、本県ではこれまでアカスジカスミカメについて多くの研究がなされてきたが、それ以外の主要種の発消生態についての研究はあまり進んでおらず、特にクモヘリカメムシの発消生態についてはほとんど調査されてこなかった。そうした中で近年、地球温暖化の影響によるクモヘリカメムシの分布域の拡大が懸念されており、クモヘリカメムシの発生が今後県内で問題となったときに防除対策を検討するための基礎的なデータを蓄積する必要がある。

そこで、2014~16年にかけて宮城県南部での休耕地と水田における定期的なすくい取り調査や、フェロモントラップとメッシュ農業気象データを利用した発生地点と気象要因との解析によって、本種の発生時期や年間発生回数、分布地域について明らかにしたので紹介する。なお、本報の一部は既に発表済みであり(大江ら, 2017a; 2017b)、北日本病害虫研究会には一部改変して転載する承諾をいただいた。

I 休耕地における発消長

クモヘリカメムシは出穂後のイネ科雑草を選好することが知られており、寄主植物としてイヌビエ (*Echinochloa crus-galli*)、メヒシバ (*Digitaria ciliaris*)、エノコログサ (*Setaria viridis*) 等があげられる(永井・野中, 1976)。クモヘリカメムシの防除対策を考えるうえで水田周辺の発生源での発生時期や発生回数を知ることは極めて重要である。そこでノビエ (*Echinochloa* sp.) の繁茂した休耕地を対象に、2015~16年にかけてすくい取りによる成虫・幼虫捕獲数の推移および解剖による雌成虫の卵巣発育状況の調査によってクモヘリカメムシの発消長を調査した。その結果、宮城県ではクモヘリカメムシは休耕地において越冬世代侵入後に2世代経過あるいは第1世代成虫の侵入後に1世代経過しており、クモヘリカメムシは年2回発生することを確認した。各世代の発生時期について、8月下旬~9月上旬に発生盛期となった成虫は第1世代成虫、10月以降に発生した成虫は第2世代成虫であると考えられた(図-1, 図-2)。

クモヘリカメムシの年間発生回数は近畿地方以西では年2~3回(長谷川ら, 1976; 岩田・葭原, 1976)、茨城県では年1~2回(横須賀, 2001; 竹内ら, 2005)、福島県では主に年1回(松木ら, 2010)と報告されている。福島県よりも北部に位置する宮城県で年2回発生した理由としては以下の要因が考えられる。横須賀(2001)は茨城県におけるクモヘリカメムシの発生回数について夏期の気温が平年よりも高い場合年2回発生し、平年並みの場合年1回発生すると報告しているが、今回調査した2015~16年は両年とも調査期間中の気温は平年並み~高く推移したため、茨城同様に年2回発生したと考えられた。そのため、夏期の気温が平年並みや低く推移した場合は宮城県でも年1回の発生となる可能性があり、年間発生回数の変動について今後さらなる調査が必要である。

II 水田における発消長

次に上記の調査と同じ地域で水田内へのクモヘリカメムシの侵入時期と発消長を調査した結果、宮城県の主

Seasonal Occurrence of *Leptocorisa chinensis* Dallas and Its Distribution Area in Miyagi Prefecture. By Takaho OE

(キーワード: クモヘリカメムシ, 分布地域, 北限, 斑点米カメムシ類, 発消長)